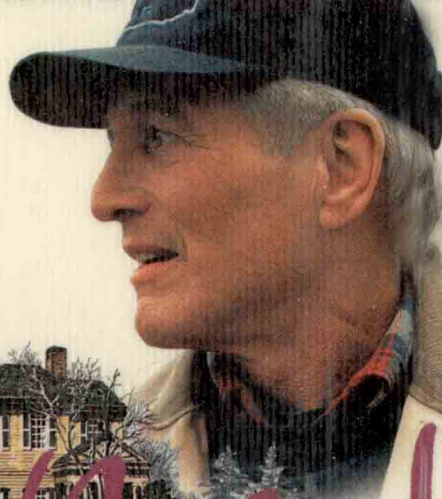




nobody's Fool
ノーバディーズ・フール

リチャード・ソレッソ

宮脇孝雄・宮脇裕子一訳

上

Nobody's
Fool

ノーバディーズ・
リチャード・ルッツ フール



福武書店は1995年4月1日に、新社名 Benesse Corporation(ベネッセコーポレーション)に変わりました。ラテン語の「bene=よく」と「esse=生きる」からつくったのがBenesse(ベネッセ)です。私たちは、ひとりひとりの充実した生活や向上意欲のサポートをしています。

ノーバディーズ・フール上 NOBODY'S FOOL

1995年5月10日●第1刷印刷

1995年5月15日●第1刷発行

著者●リチャード・ルッソ

訳者●宮脇孝雄・宮脇裕子

装丁・装画●渋谷育由

発行者●福武総一郎

発行所●株式会社ベネッセコーポレーション

〒206-88 東京都多摩市落合1-34

電話 ご注文・問い合わせ 0480-23-9233

編集 0423-56-0940

編集協力●パンブキン

文字情報処理●直江屋

印刷所●共同印刷

製本所●大口製本

© Takao Miyawaki, Yuko Miyawaki 1995 Printed in Japan

乱丁・落丁本はお取替え致します／定価はカバーに表示してあります

ISBN4-8288-2503-7 C0097 / NDC933 194 464p

Nobody's
Fool

ノーバディーズ・

リチャード・ラッソ

宮脇孝雄・宮脇裕子＝訳

ベネッセ

上

フル

NOBODY'S FOOL by RICHARD RUSSO
Copyright © 1993 by RICHARD RUSSO
Japanese translation rights arranged
with Richard Russo
c/o Sobel Weber Associates Inc., New York
through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo

ジン・レヴァーン・フィンダレイ

謝辞

著者はジョン・サイモン・グッゲンハイム財団とカーボンデール南イリノイ大学から寛大な支援を受けた。記して謝意を表したい。リンダ・スチュワートとアラン・ランコートには技術的な問題で助言していただいたことを感謝する。カーボンデールのヘクリストードスとヘデニーズ及びウォーターヴィルのヘオープン・ハースの従業員の方々には、コーヒーと理解に対してお礼をいいたい。そして、貴重な信頼と激励を寄せてくださった方々——ナット・ソーベル、ジュデイス・ウェーバー、クライグ・ホールデン、デイヴィッド・ローゼンタールの諸兄諸姉には心からのありがとうを贈りたい。そして、例によって妻のバーバラにも。

上卷目次

水曜日

9

木曜日

205

金曜日

327

下巻目次

金曜日（承前）

火曜日

水曜日

木曜日

金曜日

訳者あとがき

ノーバディーズ・フル

上

水
曜
日

ノース・パースの町の北大通りは、二ブロックの長さの商業地区を通りすぎると、三ブロックにわたって静かな住宅地が続き、やがて古い州道二七A号沿いの、もっと静かな田園地帯に変わる。二七A号は曲がりくねった二車線のアスファルト道で、ちっぼけなりゾート・タウンが並ぶニューヨーク州北部のアディロンダック山地を蛇行しながら通りぬけて、モントリオールの繁栄の巷へと通じる。町の住人がいう「北大通り」——大通りといっても、スーパーマーケットのIGAやアイスクリーム屋のティスティ・フリーズがある北の端から、サン・スーシ・ホテルがある南の端まで、せいぜい四分の一マイルの長さにすぎないが——に並ぶ家は、古びたヴィクトリア朝様式の大邸宅や、横にべつたり広がるギリシャ復興様式の屋敷ばかりで、お隣のヴァーモント州にでもあって、建てられた当時のまま保存されていれば資産価値も高かっただろうが、あいにくどの屋敷も二世帯か、ときには三世帯が住めるように改造され、何十年ものあいだ賃貸住宅として使われてきたので、徐々に朽ち果てるまま放置されていた。だが、北大通りで人の目を引くのはそんな屋敷ではなく、群生する榆の古木だった。榆の樹々の枝は古屋敷の急勾配の屋根にかぶさり、天蓋のように大通りを覆っていた。その木陰のおかげで、通りにはそよ風が吹き、古風な趣きのある朽ちかけた屋敷の、根太がゆるんだポーチや曲がった底板は影に隠れ、剥がれたペンキの跡も目立たなくなつた。北へ向かう都会の住人が、燃料や食料を求めて州間高速道路路

を下り、この町を通りかかったとき、よく車の速度を落とし、郷愁に満ちた目で車窓の外の古い家並を眺めることがある。そして、こうした屋敷はいくらで買えるのだろうか、ここに住んで緑陰の町を散歩するのはさぞ気分がいいだろう、などといったときの物思いにふける。たしかに上等な生活が送れそうに見える。長い週末を過ごしたあと、都会に帰ろうとしているとき、この光景に胸をときめかせた者は、今度もまた高速道路を下りてここに来てみようと思うかもしれないし、町の不動産屋で相場を調べてみようと考ええるかもしれない。だが、それはほんの一瞬のこと、すぐにまた、高速の出口がなかなか見つからなかったことや、ノース・バースの町が州間道路からかなり離れていること、寄り道をしたおかげで家に帰りつく時間が予定より遅れてしまったことなどを思い出すに違いない。しかも、たった三プロックの並木道を楽しいだけの目的で、わざわざ高速を下り、またもとの道路に戻ることを、後部座席で退屈している子供たちに理解させるのも難しい。たしかに美しいところだが、ここは緑の墓場なのだ。もう一度見てみたいという衝動は実現される前に消え去り、ノース・バースへの出口にさしかかっても、自動車の群れはスピードを落とすことなく通りすぎてゆく。

おそらく、それでいいのだ。北大通りのわずか三プロックの町並みに人を引きつける誘因になっているのは、家々を覆うように続く榆の巨木だが、その下に暮らしている者なら誰でも知っているように、実はその榆の樹が問題なのである。奇跡的にも胴枯れ病と縁のなかったこの並木は、長いあいだ住人たちの自慢の種だった。ところが、つい最近になって、突如としてこの榆並木が災いのもとに転じた。一九七九年の冬、みぞれをともなった暴風雨に見舞われたあと、翌年の夏になって、榆の樹のほぼ半数の葉が枝についたまま枯れはじめ、八月の暑い最中に黄色く病変して、十月半ばを待たずに散ったのである。これは専門家に調べてもらうしかない、ということに

なり、にこにこ顔の木をシンボルマークにつけた三台のワゴン車がやって来た。ワゴン車から降りた若い男たちは、医者を気取っているつもりなのか、白衣に身を包んでいた。一本一本、木を見てまわり、樹皮を採ったり、秘密の空洞でもできていると思ったのか、幹をハンマーで叩いたり、溝に落ちた腐れ落ち葉を集めて、薄らいでゆく午後の日差しにかざしたりした。

白衣の男の一人は、ベリル・ピープルズの家の正面にある楡にドリルで穴を開け、手袋をはめたまま人差し指を木の中に突っ込むと、ひとめして顔をしかめた。その昔、八年制の小学校で教師をしていたミセス・ピープルズは、ワゴン車が着いたときから、正面の部屋のブラインドの向こう側でずっと様子をうかがっていたが、男が指をなめるのを見たとき、いかにもばかにするようにつぶやいた。「どんな味がすると思ってたのかしら。苺のショートケーキの味がするわけでもないでしょうに」ノース・バースの住人にはヘミス・ベリルとして知られているベリル・ピープルズは、一人暮らしが長いため、独り言に慣れていて、言葉を口にしたときに耳に聞こえる自分の声と、頭で考えるときに心の中で発する声との区別がつかなくなっていた。彼女にいわせれば、どちらも同じ人物、つまり自分自身に話しかけているのであり、心の内で物を考えるときも、独り言をいうときも、聞き手は同じ自分なのだから、独語癖を恥じることはない。独り言をやめるには、考えるのもやめなければならぬが、もちろん、そんなつもりはなく、たとえ聞き手が自分だけだとしてもいつておきたいことは山ほどある。

たとえば、手袋をなめて洗った顔をした青二才には、あなたのような人こそ、この勘違いの時代の特徴だといってやりたかった。今のこの世界——^{よひ}齢八十にしてミス・ベリルがすでに歩調を合わせられなくなっているこの世界に、繰り返し現れる嫌なモチーフがあるとすれば、それは言語道断の無頓着さだった。「やりもしないで、どうしていけないことだとわかるんです？」若者

の多くはそういう。ミス・ペリルにいわせれば——彼女は宗教にとらわれない自由な思想の持ち主であることを自負している——よく考えさえすれば、いけないことはいけないとすぐにわかるのだ。樹液の味見をして渋い顔をした若僧は、いわば自業自得なのである。それに関しては、ミス・ペリルの友人、ミセス・グルーパーも同類だった。ミセス・グルーパーは、ノースウッズ・モーター・インの食堂で、かたつむり料理をナプキンに吐き捨ててから、この料理は菌触りが悪いし、味もよくないと大声で訴えた。友人が顔をしかめても、ミス・ペリルは同情しなかった。「おいしいはずがないのは見ればわかるでしょうに、どうして食べようと思ったの？」

ミセス・グルーパーはこの質問には答えなかった。かたつむりを吐き出したあとのナプキンはどうしたらいいかという問題で頭がいっぱいだったのである。

「灰色で、ぬるぬるしてて、見た目にも気持が悪いじゃないの」と、ミス・ペリルはいった。

それはミセス・グルーパーも認めたが、そのあと、実はかたつむりそのものではなく、名前に惹かれたのだと言いつつした。「だって、メニューはフランス語だったのよ」隣のテーブルにきれいなナプキンがあったので、汚れたナプキンとこっそり取り替えながら、ミセス・グルーパーはいった。「エスカルゴって書いてあったのが気に入っちゃって」

この国にもかたつむりというちゃんとした呼び名がある、とミス・ペリルはいった。馬糞にもフランス語の名前があるに違いないが、だからといって食べられるとはかぎらないのだ。

ただし、ミス・ペリルは、かたつむりに挑戦した友人を心の中では高く評価していた。クライヴという名前の二人の男——ミス・ペリルはそのうちの一人と結婚し、もう一方をこの世に生み出したのだが、その両クライヴも含めて、大方の人々よりミセス・グルーパーのほうが、ずっと冒険心に富んでいると思う。しかし、冒険心と単なる分別とのあいだの第三の道はどこにあるの